

修士論文（要旨）
2018年1月

複文における主語の統一

指導 青山 文啓 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
215J3002
貝谷 浩哉

Master's Thesis(Abstract)

January2018

Unification of Subject in Compound Sentences

Hiroya Kaiya

215J3002

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F.Oberlin.University

Thesis Supervisor: Fumihiro Aoyama

第1章	はじめに	1
	本稿の構成と用例出典	2
	用例出典と扱い	3
第2章	複文の構成	6
2.1	従属句の成り立ち	6
2.1.1	複文の接続助詞と構造の種類	6
2.1.2	従属句と主文の主語	8
2.1.3	従属句のまとめ	9
2.2	従属句と主文の現れ方	10
2.2.1	動詞の意志性と性格	10
2.2.2	接続助詞「と」の分類	12
2.2.3	まとめ	15
第3章	単一主語の現れ方	16
3.1	順序	18
3.2	状態への出来事	19
3.3	原因、法則	20
3.4	発見	21
3.5	まとめ	22
第4章	複数主語の現れ方	24
4.1	順序	26
4.2	状態への出来事	27
4.3	原因、法則	28
4.4	発見	30
4.5	まとめ	31
第5章	結論	33
5.1	出現回数から見えるもの	33
5.2	書き換えによる複文の自然さの違い	34
5.3	終わりに	38

注釈

参考文献

第1章 本稿は、接続助詞の「と」を含んだ複文の用法に焦点を当て、複文に現れる動詞や主語の性格、またそれらの文中での構成の傾向と制限に注目した。小説作品からの用例で接続助詞の「と」があるものを集め、この「と」を4つの用法ごとに、大きく主語が複文で1つのみ現れるか、または2つ以上かで分類した。次に、それらの複文の主語が生物か無生物か、述語が意志動詞か無意志動詞かという基準でさらに分けた。その上で、

1. 接続助詞の「と」の規定する用法によって、主語が単一となるかどうか、またどのような性格の動詞が前後関係の従属句と主文に用いられるかが決まっているか

2. この仮定に反し、「と」の規定した複文の構成でない場合、何らかの共通点が存在するか。という2点を分析目的とした。最後に、多く現れるもの、用例は存在するが出現回数が少ないものの2者と、従属句と主文のいずれかを書き換えることで自然な単一主語または複数主語の文になるもの、逆に書き換えられないものの2者に分け、なぜそれらの分類に当てはまるかを述べる。

本稿に用いた例文は、東野圭吾の小説作品『放課後』(1985年、講談社文庫)から収集したものであり、ページ番号がないものは稿者による作例である。

本稿の構成は、第2章で先行研究として複文の位置付けや接続助詞の「と」、そして複文に現れる動詞の性格を考察する。第3章では、1つの複文に主語が単一で現れた、小説からの複文例、第4章で従属句と主文の主語が異なる例、そして第5章「結論」である。

1つの文で、1つの主語に1つの述語のみのもものが単文であるが、これに対し主語や述語の構成部分の内部において、さらに主語と述語の関係があるものは複文と定義される。以下の文はそれぞれ(1)が単文、(2)と(3)が複文である(本稿における例文の表示として、それぞれ主語=____、述語=____、従属句=____、二つ以上続く従属句=□とする)。

(1) 生徒手帳の中にはバイクの運転免許が入っていました。『放課後』[p.133]

(2) 校長はゆっくりと目を開けると真っ直ぐに私の顔を見た。[p.101]

(3) 私が言うと「まさか」と周りの二、三人が笑った。[p.47]

(1)は「バイクの運転免許」が主語、「入っていました」が述語の状態動詞である。この文には従属句がなく、単文である。一方、(2)は「校長」が主語で、「見た」が述語動詞だが、間に「ゆっくりと目を開けると」という従属句がある。(3)は「二、三人」が主語で、「笑った」が述語動詞として主文が構成され、主語の前に「私が言うと」という従属句が存在する。

この2つの文は何が違うだろうか。(2)は「ゆっくりと目を開けると」という従属句、そして、「私の顔を見た」という動作を行なったのが主語の「校長」と解釈できる。

だが、(3)は主語の「周りの二、三人」が述語動詞の「笑った」と認められる一方、従属句の「私が言うと」では異なる「私」という主語が現れている。

単文は主語と動詞などの述語が文中の一つずつ存在し、何が動作を行ない、どのような状態であるか、何が行なわれたかなどの情報が読者にわかりやすい。その一方、複文では文の前半と後半の述語で、例えば能動と受動のように、正反対の表現が並ぶこともあり、その場合は(2)のような同一主語か(3)のような複数主語かで、述語も異なる。どちらも主文

の主語となっている人やものと、述語との整合性が必要であるからだ。異なる人やものが主語ではないまま、動作を異なる人やものに及ぼすか、ある状態にあることが従属句で述べられている場合、受動文、授受表現などを用いれば主語の一致が可能である。

このように従属句と主文において、主語が同一であるか、それぞれで異なっている現象は文の成り立ちや用いられる接続助詞によって左右され、時には文を作る際、動作が行なわれた行為の範囲を曖昧にする一因にもなりうる。上に挙げた(2)と(3)は接続助詞が1つのみであるため、母語話者の日本人であればあまり複雑に思うことはないだろう。

(4) 女房が作った弁当を新聞を読みながら食べ終えてコーヒーを楽しんでいると、職員室の戸が開いて、1人の生徒が入ってきた。[p.32]

だが接続助詞が2つ以上現れるか、連体修飾と同時に用いられた場合、どこまでが主語となっている人やものの動作や状態を指しているのか、また異なる主語が現れると、よりその主語がかかる範囲が曖昧となる。(4)のような長く、主語も複数現れる文になれば、文の構成が複雑に思えることも少なくはないのではないか。

本稿ではこれらの複文の現象に着目し、接続助詞の「と」が従属句に現れた際、どのような形の文が自然なものとして現れるか、または述語を書き換えることで単一主語か複数主語にできるかを明らかにする。

第2章 従属句の分類やその範囲がどう定義されているかに着目する。接続助詞の「と」が複文に現れた際の文の用法、文を作る上での動詞の種類や、その動詞が求める主語の性格など、成立するのにどんな条件があるかに注目する。また、述語動詞の意志性や働きかけの有無などの違い、主語に付く助詞の種類から、文全体の性格がどう左右されるかを明らかにする。接続助詞の「と」の持つ用法については、本稿では「順序」(以下の例では(5)と(6))、「状態への出来事」(同じく(7)と(8))、「原因、法則」(同じく(9)と(10))、そして「発見」((11)と(12))の4つに分ける。各用例を以下に単一主語、複数主語別に2つ挙げる。

(5) 大谷はそういうと本間の話の概要を話し始めた。[p.225]

(6) 尋ねると彼女は無表情のまま頷いた。[p.16]

(7) 私がそちらのほうに気を奪われていると、急に後ろから肩を叩かれた。[p.33]

(8) テントの下でぼんやりとトラック内を見ていると、竹井が近付いて来た。[p.188]

(9) 犯人の行動なり状況なりを、あらゆる角度から限定していくと、だいたいの輪郭はつかめてくるのですよ。[p.172]

(10) 口に出してみると急速に実感が湧いてきた。[p.130]

(11) 入口付近まで行くと、中に人の気配を感じることができる。[pp.310-311]

(12) 応接室に行くと、大谷は窓際に立ってグラウンドを眺めていた。[p.153]

第 3 章 小説作品からの用例を対象に、単一主語の複文を収集する。接続助詞の「と」を含んだ複文を作る際、どのような傾向や制限があるか、主語と述語動詞の性格で分け、更に 4 つの用法ごとに分析、解説を行なう。従属句が 2 つ以上登場する例も必要に応じて扱う。

第 4 章 同じ小説作品からの例で、前章とは逆に主語がまとめられずに 2 つ以上存在する複文を扱う。また、この章でも 2 つ以上の従属句を含む文を取り上げる。

第 5 章 結論 用例を登場頻度の多い順と、主述それぞれの性格から、単一主語例と複数主語例それぞれでそれらの違いが生じた理由、またどのような文の構成上の制約があるかを結論付ける。現れ方に多様性があったのは複数主語例であった。以下に一覧を挙げる。

	単一主語例	複数主語例
順序	132	75
原因、法則	11	38
状態への出来事	2	17
発見	4	47
総数	149	177

【 全用例登場頻度】

文意からの違いとしては、「順序」のみ、残りの 3 つの用法のものと異なった。従属句と主文の述語動詞が瞬間的なものであり、主文の述語動詞が過去形の場合、接続助詞の「と」が異なる接続助詞へ書き換えられない。逆に残りの 3 つの意味の文は接続助詞の「と」が「たら」「れば」への書き換えが可能である点で異なった。

一方で複数主語例では本稿で定めた 4 つの用法のうち、「順序」がこちらでも多く現れた一方、残りの 3 つの意味のものも若干単一主語例より多めに現れた。だが、文の構造上の観点からは、文の前半に生物主語と意志動詞が現れる例が圧倒的に多かった。さらに、後半の主文では同様の生物主語と意志動詞の例と、逆に無生物主語に無意志動詞という例が同じほどに現れた。複文としての用いられ方から察する場合、主語が単一か複数かを問わず、文の前半にこの生物主語と意志動詞の組み合わせが現れやすいということが言える。

また、用例数は少ないものの、自然な形として現れた例もある。例えば乗り物を主語とした意志動詞文、逆に生物主語には可能形や授受表現、受動文などの無意志動詞の述語例である。これらは違和感なく自然に用いられているが、全く異なる性格の述語、つまり述語動詞が自ら他の主体に働きかけるものもあり、逆に働きかけがなく、逆に働きかけを受けるものが 1 つの複文で同時に用いられる。ただ、それには用いられる動詞の形や接続助詞の意味など、様々な条件があり、それらに適合させなければ違和感が生じる。

具体的に無生物主語に意志動詞の例では、乗り物の主語以外は現れなかった。また複数主語の文では、主文か従属句のいずれかを受動文や授受表現などで書き換えれば、単一主

語の文にできるものが存在した。逆に単一主語の文でも、受動文などの述語を能動文に書き換えれば、自然な複数主語の文となるものもある。ただし、両者とも述語動詞が異なる主体に働きかけない、または自他動詞のペアがなければ、このような自然な書き換えはできないという制約が存在した。

【参考文献一覧】

- 金田一春彦(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 工藤真由美(1990)「現代日本語の受動文」『言葉の科学』4 47-102 言語学研究会編
むぎ書房
- 久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 豊田豊子(1978)『接続助詞「と」の用法と機能(I)』日本語学校論集 5号 pp.28-46 東京
外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 豊田豊子(1979)『発見の「と」』日本語教育 36号 pp.91-109 日本語教育学会
- 豊田豊子(1979)『接続助詞「と」の用法と機能(Ⅲ)—後件の行なわれる時を表す「と」—』
日本語教育 6号 pp.91-105 日本語学校論集
- 豊田豊子(1982)『接続助詞「と」の用法と機能(Ⅳ)—後件の行なわれるきっかけを表す「と」—』
日本語学校論集 9号 pp.1-16 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 豊田豊子(1983)『接続助詞「と」の用法と機能(V)—因果を表す「と」—』日本語学校論
集 10号 pp.1-24 東京外国語大学附属日本語学校
- 野田尚史(1986)『複文における「は」と「が」の係り方』日本語学 2月号 pp.31-43 明治
書院
- 杉本武(2005)『日本語複合格助詞の格体系における位置づけについて』 KLS25、関西言
語学会
- 三尾砂(1943)『話言葉の文法(言葉遣篇)』復刊(1995)くろしお出版
- 三上章(1972)『現代語法新説』くろしお出版
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

【用例出典】

- 東野圭吾(1985)『放課後』講談社文庫